

はじめに

西脇順三郎は難解な詩人だと思われてきた。しかし、次のような詩はどうであろう。

天気

(<sup>くつがへ</sup>覆された宝石) のやうな朝  
何人か戸口にて誰かとささやく  
それは神の生誕の日。

この詩のなかにある比喩を難解だなどという人はいないであろう。宝石箱がくつがえされて、飛び散った宝石がきらきらと輝いている朝を連想すればいい。そ

これは感覚でしか捉えられないもので、それが詩なのである。もちろん、「神の生誕の日」が、いつ、どこでの話なのかということを考えていくと、この詩が収録された『Ambarvaia』(アムバルワリア)という詩集についても知らなければならぬ。

しかし、この本ではそうした読者の疑問に答えられるように、西脇順三郎という人物の経歴や詩に対する考え方を分かりやすく解説している。西脇を語る

とき、この分かりやすさこそ重要なのである。長い間、われわれは、この大詩人の存在に手を焼いてきた。あるいは、見て見ぬふりをして通り過ぎてきたのである。あまりにも巨大過ぎて、逆にその全貌が見えにくかったのかもしれない。

谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫らの名前が、ノーベル文学賞の候補として、世間の注目を集めていた時代に、西脇もその候補者の一人とされてきたのである。ノーベル賞は、発表から五〇年を経てはじめて、その候補者名や選考経過が公表される。西脇が、一九五八(昭和三三)年から毎年のように候補にあがっていたということは、今日、明らかとなっている。その意味で、西脇は、西洋と日本と

つないだ特異な詩人であるといっている。

二〇一四(平成二六)年に、西脇の故郷、小千谷市(新潟県)で、西脇順三郎生誕一二〇年の記念行事が催された。そのシンポジウムの席上で、ある詩人が、西脇の詩は鬱病に効くと発言された。たしかに西脇の詩を読み返してみると、地中海の陽ざしのような明るさがある。さらに、彼の詩は、小さな人間の思惑など、遙かに超越してしまっているのである。現代は、「ウツの時代」などとよくいわれるが、そんな時代だからこそ、西脇順三郎は読み返されるべきだと、私は考える。

はじめに

この本の共同執筆者である太田昌孝氏は、長年、西脇研究に携わってこられた詩人で、西脇とその故郷、小千谷について多くの論考がある。折しも、二〇一三(平成二五)年の四月から一年間、太田氏と私が、小千谷とロンドンという西脇の精神形成において重要な場所へ赴任することになった。詩人の生誕一二〇年を翌年にひかえて、二人で西脇にゆかりの深い「新潟日報」に、その聖地を訪ねるという連載をすることを約束してわかれた。

私が赴いたロンドンは、この詩人が三年半留学し、最初の奥さんと出会った場

所である。そうした西脇の聖地に、短い期間ではあったが、私は『定本 西脇順三郎全集』をもって移り住んだ。

連載は、一四年六月一三日から一五年一〇月二三日まで、約一年半にわたって続いたが、たまたまこの記事に目をとめてくださったクロスカルチャー出版の川角功成氏から、本書をまとめるお話しをいただいたことは、幸いなことであった。ここに記し留めておきたい。

加藤孝男

## あとがき

例年に比べてかなり少なめの雪に覆われた小千谷の街をホテルの五階から眺めている。心のどこかで大雪を期待していた自分の心を分解すると、そこに見えて来るのは旅人の気楽な想いだ。かつてこの街に住んだ年には雪ほど厄介でふてぶてしいものはないと考えていたのに、人の心というものは実に曖昧で、身勝手なものである。

四年前の春、加藤孝男氏はロンドンへ留学し、私は国立長岡高専教授として新潟県に赴任し、小千谷駅近くのアパートに同居を構えた。お互い同時に西脇順三郎と縁が深い街に住み、独居生活を始めることになったわけである。加藤氏の場合是一年という任期がはっきりしたものであったが、私の場合はそれが何年に及ぶものか、見当のつかない生活であった。

そのような足元の覚束ない毎日を慰めてくれたのは、日常生活のなかで目にす

る小千谷の風景であった。引越しの準備中、二女とコーラを飲みながら眺めた山本山の雪景色、船岡山の満開の桜、早乙女の季節に輝く水田、盛夏の信濃川を見下ろす深地の崖、山寺の低山を照らす月明り、重く垂れこめた黒雲と小千谷高校の落葉、そして遠雷と共に訪れた雪の日々。

そのどれもが太平洋側の温暖な町で過ごした私には新鮮であり、受け止めねばならない日常でもあった。そしてその日常のなかで生きることが西脇詩の基層にある絶対的な現実を追体験するという貴重な機会でもあった。

冬、偶居の炬燵で暖を取りながら、遠いロンドンにいる加藤氏のことを考えた。黒いコートでロンドンを闊歩し、パブでビールを飲む姿が何度も浮かんだ。私は駅前の「小千谷そば和田」で、きこの蕎麦を肴に「越の白雁」を一合だけ飲む自分の姿や、長靴を履いた小見山氏と雪道を歩きながら西脇生誕百二十〇年のことを話し合った寒い夜の風景を、加藤氏のロンドンでの姿と重ね合わせてみることを何度も試みた。人間の生の偶然性、そして西脇の聖地へ旅に出た二人の胸に、西脇順三郎という共通の巨星が輝いていることの不思議を想い、一人苦笑したこともある。その日々の断片は三年半を経た今でも色褪せることはない。

今回、「新潟日報」に一年半連載した「聖地をたずねて」を一冊にまとめ、加藤氏と共に上梓することになった。ロンドンと小千谷に身を置いたわれわれの眼や耳が、西脇の放つポエジーに操られながら実はある一つの定点を見据えていたことに気づいていただければ幸福この上ない。

この出版（新聞掲載）の契機となる拙著の出版記念会が名古屋市伏見のパブ「英吉利西屋」において企画されたのは二〇一三年二月のことであった。二次会を終え、寒風の吹く街を歩き、伏見駅八番出口に辿り着いた時、参加者の一人が「加藤さんと太田さんは奇しくも同じ年に西脇の聖地に行くわけだ」と口走った。その言葉を聴いた加藤氏と私が、共にほくそ笑んだことは言うまでもない。これが本著誕生の秘話である。

最後に、本著の刊行に際し、ご尽力いただいたクロスカルチャー出版の皆様、新潟日報社の橋本佳周氏、高内小百合氏、ブックカバーのデザインを担当してくれた熊谷比奈さん、鈴木七海さん（共に名古屋学芸大学メディア造形学部三年生）、そして貴重な写真等をお貸しいただいた小千谷市立図書館の方々に感謝の意を捧げたい。

また、本著の源泉とも言える拙著の出版記念会を企画してくださった故大島龍彦氏（名古屋学芸大学教授）の魂が永劫に安らかなることを祈る。

太田昌孝